◆ 講演とシンポジウム「大倉幕府と周辺遺跡群の価値 ―世界遺産登録に向けて―」◆

五味文彦さん講演「大倉御所とその周辺」

ユネスコへの鎌倉の推薦に尽力された文化庁文化審議会委員長の五味文彦さん（東大名誉教授）を迎えて3月17日（土）、大倉幕府と周辺遺跡群についての緊急シンポジウムが開かれました。大倉御所周辺遺跡（元治苑跡地）の開発問題をきっかけに、大倉御所と周辺遺跡全体の価値を考え保存の在り方を探ろうとする試みです。日本考古学協会の馬淵和雄さんが大倉御所跡と周辺遺跡の保存可能性を検証し、清泉女子大名誉教授の梅津尚志さんが住民を代表してシンポジウムに参加しました。（コーディネーターは推進協議会広報部会長の内海恒雄さん）。以下、五味さんの講演要旨です。

◉頼朝の御所の形成と鎌倉の整備

初期の武家政権、武家文化を評価付けする上で重要なことは、頼朝の出発点である治承四年（1180）を基軸に10年ごとの変化を捉え、大倉御所の位置付けを明確にしていくことだ。出発点は『吾妻鏡』と同じで、「伊豆の北条館」はそのほぼ10年前、1170年頃に造られている。これは、平泉の柳之御所と同じ時期である。大倉御所の直接の前提は頼朝の父「義朝の亀谷館」で、今の寿福寺辺りという。また頼朝は鎌倉に入る前に、亡兄「朝長の松田館」に修理を加えさせている。柱間が25間あって広大だった。この3つの館が基軸になって、大倉御所があり、大倉幕府の形ができた。

治承四年10月11日に政子が鎌倉入りし、12日に鶴岡八幡宮を現在地に遷す。大倉御所内には小御所、厩、寝殿、西侍、政所、公文所が造られた。奥州合戦が終わると奥州から良い馬がたくさん入ってくるようになり、厩がさらに造られている。永福寺は、奥州合戦の怨霊を弔う目的で建立したが、大長寿院を模して二階堂が造られた。この段階ぐらいまでが館が次第に広がりながら、形が整えられた段階である。

◉幕府再建　武家文化の展開と周辺遺跡群

建久元年（1190）、頼朝の上洛を機に武家政権としての自信を得たことから、京都の文化を取り入れるようになる。建久二年の鎌倉大火で幕府も鶴岡八幡宮も焼けてしまったが、これが鎌倉の御所の新しい展開になり、若宮造営では、上宮をあらたに石清水八幡宮から勧請した。それまでは先祖の頼義が私的に勧請したものの延長上だったが、鶴岡八幡宮を公に勧請したのである。

建久二年、頼朝は御所に南門を建てる。大倉御所の機能では南門というのは非常に重要であった。南門の外で行列を整える。南門の外には広場のようなところがあったのだろう。その位置を考えるうえで想像力はとても大事である。そのためには鎌倉だけでなく、隣の地域はどのようであったかなどを研究していくことだ。鎌倉幕府の全体像を知ってこそ想像力が生まれる。

また建久二年には御行始（おなりはじめ）があって、大倉御所近くの八田右衛門尉の家に行ったとある。それがどこか。いつの時期の建物か。いつ壊れたのか。これらが明確に見えてくると確証になる。奉行、問注所が郭外に建てられたとあり、大倉御所のすぐ近くと考えられる。これも重要な記事で、周辺遺跡の問題と考える。御所という郭があって周辺の遺跡がある。郭の取り方により、二重三重の同心円的構造を御所は持っているという風に考えていいのかも知れない。

◉和田合戦と新御所再建～大倉御所の終焉

頼朝が亡くなった後、建仁三年（1203）の記事に、大倉御所が出てくる。頼朝の遺跡で、後家の政子が住んだ。その後の和田合戦の描写でも、南門は重要な攻防の拠点になっている。和田合戦で御所が焼けてしまうので再び御所が造られる。ここでまた新しい段階になる。建暦三年（1213）7月9日に、神主にお祓いをしてもらって地鎮祭が行われる。そこに中門を建てる。基本的には玄関である。中門ができるということは、門が南にはなくなる一方、西と東に必ずできる。それが西御門、東御門という地名として残っている。現在に残ってくるのはこの段階のもので、それがそのままなのかどうかはっきりしないが、そういう名残が西御門や東御門である。南御門は残っていない。政子の死後、北条泰時が御所を宇津宮辻子（うつのみやずし）に遷し、大倉御所は終焉を迎える。

シンポジウム発言

国指定史跡になるためには、遺物、遺跡、遺構の性格がきちっと定められることが必要最小限のことだ。何よりもしっかり史跡にするという強い意思がなくてはならない。市民を積極的に巻き込んでいくような人、これを何とかするのだという人が行政にも必要だ。特に行政が市民の力をいかにして結集していけるかにかかっている。全体で考えると大倉御所が原点になっているわけだから、現代にまで関わる歴史の力、地域の力みたいなものを行政と住民が一緒になって掘りだして、次へと向かってほしいと思う。